

「末の松山浪越さじ」とは?

清水 大吉郎¹⁾

契りきなかたみに袖をしぼりつつ
末の松山浪越さじとは 清原元輔

御存知小倉百人一首のひとつ(そんなの知らない?). 作者元輔(908~990年)は三十六歌仙の一人, というより清少納言の父親といった方がわかりが早い. 百人一首の歌は掛け詞, 故事来歴など後代の人間にはわかりにくいものが多く, 落語の種にもなったりしているが, この歌もわかりにくい. 一応現代語に訳すと, 「お互いに涙を流しながら約束しましたね, 末の松山を浪が超えるようなことがないように(だのにあなたは)」となる. 元輔老がある女性に頼まれて代作したのだという(男の歌ではさまにならない). これでも何のことやらわからないが, 当時の歌人達にはすぐ理解された. いわゆる本歌取りである.

元歌は古今和歌集, いうまでもなく十世紀はじめの最初の勅撰和歌集で, その巻二十に東歌みちのくうたとして載っている.

きみをおきてあだしころをわがもたば
すえの松山浪もこえなむ

この方はまだわかりやすい. 「あなたという人がありながら私が他の人に心を移したならば末の松山を波が越える(ような天変地異が起こる)でしょう. いやそんなことはいたしません」という愛の誓いの歌. 天変地異になぞらえて永遠の愛を誓うというのは洋の東西を問わないが(シャンソンの愛の讃歌の如し), それにしても山を波が越すという発想はどこから生まれたのか? それは現場へ行って見ればわかる.

仙台市の東, 仙石線多賀城駅のすぐ南に末の松山という小さい丘がある. 末松山というお寺の裏で松の木の間には墓が並んでいる. その状景は310

年前松尾芭蕉が「おくのほそ道」の旅で訪れた頃と変わらない. 今は住宅地の中になってしまって, とても波に関係のある所とは見えない.

多賀城というのはここから北2kmほどの台地上にあった奈良時代から平安時代の軍事拠点で, 陸奥国府もあった. その台地の下には港があり, 海は現在の仙台平野全体にひろがっていて, 末の松山などは島として点在していた. 古今集が編まれた時より数十年前, 貞観十一年(869年)に陸奥国で大地震があり, 多くの建物が倒れ, 津波が多賀城下に襲来して溺死者1,000人であった(新編日本被害地震総覧による). この大津波では丘の上の松にも波がかかるほどであったろう. これより70年前にも東国東海岸一帯の大津波が記録されている. 古くからの大異変の伝承から, 松の木のある山を波が越すという発想が生まれたのだろう.

元輔ら都の歌人達はそんなことは想像だにせず, 遙かなみちのくの歌枕としての名のみが伝わった. 末の松山という特定の地名があった筈はないのだが, いつの頃からか場所として固定されたい(和歌好きの殿様から歌枕探しを命ぜられた御用学者が適当にみつくりたのではあるまいか). 末の松山のすぐ南に沖の石というのもある(沖の江, 沖の井ともいう). 池の中に岩が立っていて外から眺めると上部三畳系の砂岩のようである.

津波の来るような湾がやがて川によって埋積されてくると, 自然堤防の荒地の上に萩が生い繁り, 歌に詠まれるようになる. 任期を終えて都に帰ったある国司は十数株の萩を根こそぎ車に積んで運び, これぞ「宮城野の萩」と都大路を引きまわして, 京童の目を驚かせたという. 現在の大都市化した仙台からは容易には想像できないが, 地質や地形から千年来の自然と人の生活の移りかわりを思い起こしてみるのも意味がある.

1) 〒606-8221 京都市左京区田中西樋ノ口町48

キーワード: 末の松山, 多賀城, 百人一首, 清原元輔, 津波